

航米日録 卷六

【ニューヨーク港出航から南アフリカ喜望峰を経てインドネシアのアンシヤボエン港まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974年12月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名誉教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は()内に示した。
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に**朱記**にて示した。
- (5) 2月2日午後6時頃に、東経から西経へ日付変更線を通じたので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に**緑記**した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦万延元(1860)年5月12日(新暦6月30日) 【5月13日】晴、西北の風。

午後初めて碇を揚げて【ニューヨーク港から】南に向う。二三里【4km】航行すると海門を出て、東南に向う。午後4時過ぎに順風となり数帆を揚げて航行する。船の速度はかなり速い。この船【ナイアガラ号】は、船内の規則が厳しくて、水夫と言えども【日本人一行と】言葉を交わすことは無く、大変寂しいばかりである。且つ、トイレは官吏を除いて、その他【の米国人は】皆水夫と同じく船尾のトイレを数人が列をなして使用する。彼等は尻の当たる所を円にして、便をするときその円なる所に尻をぴったりと付け、煙草を吸ったり談笑して用を足す。日本人一行は俄かに彼等米国人の様に真似て用を足すことが出来ないので、皆困却した。このため、その内容を官吏に申し出て、中層の士官用のトイレ一個を借りた。このトイレは一人用であるので、各人氣楽に用を足し、皆安心した。

○寒暖計84度【28.9℃】

旧暦万延元(1860)年5月13日(新暦7月01日) 【5月14日】曇、東北の風。

今朝になって東に向う。午前10時過ぎ、東風に変わり、帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関のみにて航行する。波濤は非常に穏やかである。今日は日曜日で、船中の米国人は各人服を着替えている。午後神父が聖書を読み、士官及び水夫に至るまでこれを聞いている。午後2時過ぎ、船の左右に蒸気船二艘を見かける。

皆米国船である。さて、従臣の飲食は部屋前に数人相交わって混雑する。且つ、器物が少なく副食物を分けることが出来ず、各人争って食事する。非常に混雑する。米国人はこれを見て大笑いする。

○寒暖計64度【17.8℃】○昨日の正午より今日の正午迄181海里○北緯40度42分30秒○西経70度18分35秒

旧暦万延元(1860)年5月14日(新暦7月02日)【5月15日】晴、東南の風。

又、東に向う。波濤は静かで、船の速度は非常に速い。午後南風に変わり、数帆を揚げる。このため、蒸気機関を直ぐに停止した。昨日から冷気が吹き、袷着を着ても尚寒さを感じる。

○寒暖計72度【22.2℃】○正午迄191海里○北緯39度26分○西経66度26分

旧暦万延元(1860)年5月15日(新暦7月03日)【5月16日】晴、東北の風。

又、東に向う。風は順風ではないで船のスピードは速くない。夜になっても状況は同じ。

○寒暖計75度【23.9℃】○正午迄167海里○北緯39度21分○西経62度04分15秒

旧暦万延元(1860)年5月16日(新暦7月04日)【5月17日】晴曇不定、東南の風。

又、東に向う。今朝から風が強くなり、波濤は非常に高く、船の揺動が烈しくなった。波濤は時として船尾に飛んで来る。午後大砲の訓練があり、その遣り方は、ポーハタン号と同じである。午後2時過ぎ、風波が益々烈しくなり、部屋で安閑としていることは出来ない。夜も同じである。

○寒暖計74度【23.9℃】○正午迄203海里○北緯39度10分15秒○西経58度49分

旧暦万延元(1860)年5月17日(新暦7月05日)【5月18日】雨、南の大風。

今朝になって東南の方向に向かう。昨日から風雨が烈しく、船の揺動が止まらない。波濤が船上に飛んで来る。部屋中の道具類が左右に転倒したり、破損したりする。このため、日本人は皆戦々恐々としているが、一方米国人はこの様な状況を気にせず、かえって船の速度が速くなるのを喜び、直ぐに蒸気機関を止めて数帆を揚げる。又、中層にて悠々として音楽を演奏する。自分はこの状況を見て少なからず安心する。夜に入っても風雨は止まない。

○寒暖計72度【22.2℃】○正午迄253海里○北緯38度51分○西経53度27分

旧暦万延元(1860)年5月18日(新暦7月06日)【5月19日】曇、細雨 南の風。

又、東南に向う。今朝になって風雨がようやくと止み、波濤が静かである。

午後4時過ぎ、難破船を見る。二個の壊れたマストが海上に露出し、何処の国の船かは分からない。昨日の風雨でこの難に遭遇したのであろう。この情景を見る者は、無意識に戦慄を感じる。夜、風波は非常に穏やかで、皆安眠する。

○寒暖計77度【25.0℃】○正午迄240海里○北緯38度05分○西経49度31分

旧暦万延元(1860)年5月19日(新暦7月07日)【5月20日】曇、細雨 南の風。

又、東南に向う。風が強く、船の速度が非常に速い。午後になり風が急に止み、帆を揚げる事が出来なくなり、海中に漂流する。夜も同じである。今日日本の午線を通る【日本に取っての日付変更線の意味を玉虫は誤解している】。

○寒暖計78度【25.0℃】○正午迄193海里○北緯37度45分○西経43度30分50秒

旧暦万延元(1860)年5月20日(新暦7月08日)【5月21日】曇、午後晴、西南の風。

又、東南に向う。風が静かで船の速度は速くない。午後蒸気機関を作動する。夜、西風に変わり満帆風を受けて船の速度は非常に速い。今日は日曜日で船中の者、皆服を着替え、神父がキリスト教の聖書を読む。

○寒暖計79度【26.1℃】○正午迄115海里○北緯37度30分○西経40度08分40秒

旧暦万延元(1860)年5月21日(新暦7月09日)【5月22日】晴、南の風。

又、東南に向う。始めのうち船の速度は速かったが、午後になり忽ちに風が止んで航行が十分には出来なくなった。

○寒暖計75度【23.9℃】○正午迄199海里半○北緯34度52分○西経37度22分

旧暦万延元(1860)年5月22日(新暦7月10日)【5月23日】晴、東北の風。

又、東南に向う。風が無く、船の速度は遅い。夜午前0時、西方に月虹が見えた。日中の虹は時折見かけるが、月虹は此の時初めて見た。

○寒暖計76度【24.4℃】○正午迄174海里○北緯32度57分○西経35度10分

旧暦万延元(1860)年5月23日(新暦7月11日)【5月24日】晴、午後晴、東北の風。

今日になって、南東に向う。風が無く、船の速度は遅い。午後船中の防火訓練があり、船上で半鐘を鳴らす。水夫達が各人兵糧(パン)を布袋に入れ、これを担いで船上に登り、小船に乗って火災現場から避難するものであった。又、革管【ホース】で水を放水する、その技は軽快で一つのもれも無い。これは航海者の必須習得のものである。夜は依然として風が静かで船の速度は遅く、唯洋上に漂流している。夜半になり、蒸気機関を作動させたため、船の速度が少し遅くなった。或る時他の人が自分に望遠鏡を使わせた。その望遠鏡は昼夜使用し、たと

え暗夜と言ってもはっきりと見える。値段を聞くと70ドルから100ドル以上との事である。

○寒暖計80度【26.7℃】○正午迄138海里○北緯30度25分○西経34度18分

旧暦万延元(1860)年5月24日(新暦7月12日)【5月25日】晴曇不定、東の風。

又、東南に向う。昨夜から蒸気機関で航行しているため、船の速度は非常に速い。夜午後8時頃、俄かに暴風雨が来ようとして船長が下知して船中の窓を全て閉めさせ、予め波濤による被害を防御させた。唯、雨だけが降るのみで大事には至らず、全員安堵した。

○寒暖計82度【27.8℃】○正午迄115海里○北緯28度49分○西経33度18分

旧暦万延元(1860)年5月25日(新暦7月13日)【5月26日】曇、東北の風。

又、東南に向う。横帆を揚げて風を大いに受けて航行する。又、蒸気機関を作動させているため船の速度は非常に速い。午後、水夫と小砲隊の訓練があった。午後2時過ぎ、船の左舷に一隻の船を見る。遠くなので何処の国の船かは分からない。夜、西方に彗星を見るが、影が薄くてどれであるか視認出来なかった。

○寒暖計79度【26.1℃】○正午迄190海里○北緯26度14分○西経31度20分

旧暦万延元(1860)年5月26日(新暦7月14日)【5月27日】晴、東北の風。

又、東南に向う。風波は昨日と同じで、船の速度の速い事は最近の比ではない。

○寒暖計81度【26.1℃】○正午迄222海里半○北緯23度08分○西経29度29分

旧暦万延元(1860)年5月27日(新暦7月15日)【5月28日】晴、東北の風。

又、東南に向う。横帆を揚げる。船の速度は非常に速い。今日は日曜日で行事は以前と同じである。夜になって風波が静かになり、座上に静かにしている感じである。今日、太陽の直下を通過した。

○寒暖計78度【25.6℃】○正午迄220海里半○北緯20度23分40秒○西経27度20分

旧暦万延元(1860)年5月28日(新暦7月16日)【5月29日】曇、東北の風。

又、東南に向う。午後になって南西に向う。船の左方に高山が見える。又、一時間ほど経て左側に一山が見えた。この両山の間を通過して港に入る。ここはシントウエンセント《St. Vincente》と言う島で、港の名はホールトカランテ《ポートグランデ：Porto Grande》と言う所である【緯度・経度から判断して、アフリカのセネガル共和国の西約600kmの大西洋上の諸島】。アフリカ(亜弗利加)のケープウェ

ルト群島中の一つで、ポルトガル(葡萄牙)領である。夕方なので形状が良く分からない(大略は後述)。午後6時頃から東岸方向に良く流星が光っていた。この島は、提督としても来た事もあるので、饗応のためであろうと言う事であった。ここは北緯21度17分で、昨日既に太陽の直下を通過した。寒暖計は78度になるだけで、それ以上には炎熱を感じない。考えてみると地勢のなりゆき、海風の多少によってこの様な気候になるのであろう。太陽の直下と言っても、必ずしも極熱にはならない。

○寒暖計80度【25.6℃】○正午迄203海里○北緯17度53分○西経24度53分○今日の正午からこの島まで50海里○北緯17度03分○西経25度

旧暦万延元(1860)年5月29日(新暦7月17日)【6月01日】晴。

滞留【**ポートグランデ**】。石炭(煤石)を船中へ積み込むが、夜半に漸く終わる。午前10時過ぎ、英国軍艦一艘が入港する。午後、陸上からパイナプルと言う果物を売りに来る者が居て、良く日本語を覚えており、「分からない」、「スケベイ」と言う。彼はかつて庸夫となって日本に来たことがあると言っていた。午後2時過ぎ、ポルトガルのゼネラル(総督)及び英国のコンシール(領事)が来た。祝砲を鳴らし音楽を演奏して饗応する。ゼネラルはこの島の総督で巡見のため昨日この島に来たとのこと。英国領事は此処に在住して本国より輸入する石炭を管理・配分すると言う事である。

○寒暖計不試

シントウエンセント《St. Vincente》島情勢

この島はアフリカのケープフェルデ《緑峰:Verde》群島の一つで(アフリカの西岬で、この諸島はこの岬の近くにあり、そのため緑峰群島と言われている)、島数全14で(訳書には一:サル、二:ホーヒタス、三:マヨ、四:サントヤゴ、五:ガランテ、六:ロムホ、七:サオニコラオ、八:サオロジヤ、九:ホゴ、十:プラハ、十一:フランコ、十二:ラソ、十三:シントウエンセント、十四:サオアンタオ)、皆ポルトガルの所領である。港名をホールトカランテと言う。東北から南西にかけて湾曲して山がある。西南方向に一つの小島(サオアンタオ島)があり、その際が大湾で周囲七・八里程、海門が二つあり、一つは東北に面し、もう一つは西南に向かい、互いに相対している。風浪を避けるには最適の場所で、群島中第一の良港である。しかし、全島皆山ばかりで、険しく切り立った岩場で草木が育たず、唯、山容の奇怪さは、馬の背、臥牛、筆頭或いは斧痕(ふこん)の様である。又、山頂の所々に洞穴があり、まるで門戸があるように見える。土地は皆砂石で不毛の地であり、水に乏しく、町中に僅かに二つの井戸が有るが、保水

力が弱く、一桶汲めば忽ち枯渴する。このため、住民は他の食を待っている。群島中土地豊かな場所があり、米、コーヒーその他、美味しい果実を産すると言われているが、現在は、その地には行けていない。人の居住する家が東方の山麓に僅かに四・五十戸あり、英国から石炭を輸入してこの地に貯蔵し、船の石炭欠乏に備えると言う事である。

風俗

男女は肌の色が黒くて縮れ毛であり、その容姿は醜い。衣服は日本の風呂敷の様な布を着用し、腰には腰巻のみを纏っている。家の作りは板を壁として、茅の類で覆い、土の床にそのまま座っている。粗雑さを極めるものである。国民は頑迷固陋で豆と麦の区別さえ出来ない愚か者《菽麦(しゆくばく)ヲ弁ぜず》である。官吏の一人二人が小便のため上陸した。その際、衣服を捲り上げたが、現地人が何と思ったのだろう、非常に恐怖を感じて大声を出して逃げ去ったと言う。その愚かさは以て知るべしである。

時候

この島は北緯15度、西経29度の所で、非常に炎熱の場所であるが、常時海風が吹き、寒暖計80度【26.7℃】以上には上がらない。自分達が到着したときは太陽の直下であったが、炎熱は酷くなく朝夕は袷衣を着ていた。

草木

この群島には、米・藍・木綿・煙草、その他の良美な果実を産出すると聞いているが、上陸しないのでそれらを見る事が出来ない。唯、船中に持ち込まれている物を見ると、ハイナーフン《パイナップル》と言う果実一種類である。パナマ港の産と同じものである。

生物

群島には、牛・羊・ロバ・鳥類が多いと言われているけれども、自分は見えていない。唯、船中に持ち込まれた塩漬けの魚を見ると、その形は鯛・鱈(たら)に似ている。

貨幣

この島では貨幣を鑄造せず、ポルトガルから輸入している。しかし、諸外国の船舶の停泊地になっているため、諸国の通貨が流通するとの事である。

物価

上陸していないため、物価に着いては分からない。

旧暦万延元(1860)年6月01日(新暦7月18日) 【6月02日】晴、東北の風。

午前8時頃、碇を揚げた。始め西南に向かって一里程航行し、そこから南東に向って海門を出る。その場所から横帆を揚げ、且つ蒸気機関を作動させたため、船の速度は非常に速い。夜は昨日よりも炎熱が凄かった。

○寒暖計76度【24.4℃】○午前8時から正午迄58海里○北緯16度03分○西経25度04分

旧暦万延元(1860)年6月02日(新暦7月19日) 【6月03日】晴曇不定、時々小雨、夜暴雨、南の風。

又、東南に向う。午後南風が変わる。波濤が高く、船はかなり揺動する。夜12時頃大雨が降り、船が揺動すること物凄かった。且つ、南風のため蒸し暑さが酷く、安眠出来なかった。

○寒暖計81度【27.2℃】○正午迄194海里○北緯13度28分45秒○西経23度36分22秒

旧暦万延元(1860)年6月03日(新暦7月20日) 【6月04日】晴曇不定、西北の風。

又、東南に向う。順風で船の速度が速いため、蒸気機関を停止した。一日中驟雨が降っていた。夜になり風が止んだので船の速度が遅く、漂流状態であった。炎熱で安眠が出来ない。

○寒暖計83度【28.3℃】○正午迄186海里○北緯11度45分○西経20度50分

旧暦万延元(1860)年6月04日(新暦7月21日) 【6月05日】曇、午後晴、夜暴雨、南西の風。

今日になって、東南の中心に向う。昨夜から風が止んだので船は進まない状態であった。今朝になって俄かに蒸気機関を作動させ、午前10時過ぎに西南の風が吹き込むようになったので、船の速度は非常に速くなった。船の右舷に一艘の船が見える。互いに国旗を揚げると、米国の商船であった。夜12時頃、暴風雨となる。波濤は静かなので揺動も少ない。

○寒暖計80度【26.7℃】○正午迄119海里○北緯10度23分○西経19度31分

旧暦万延元(1860)年6月05日(新暦7月22日) 【6月06日】曇、時々小雨、南の風。

又、東南に向う。今日は日曜日ので何時もの行事を行う。夜12時頃驟雨が降る。

炎熱であった。

○寒暖計82度【27.8℃】 ○正午迄200海里○北緯7度51分半○西経16度36分45秒

旧暦万延元(1860)年6月06日(新暦7月23日)【6月07日】曇、午後晴、南の風。

又、東南に向う。風が静かで船の速度は遅い。午前10時過ぎ神父が聖書を読む。午後船長が船内の規則を読み聞かせる。この船では、キリスト教及び船内の規則を皆に聞かせること日に二度或いは一度、風雨の場合でも怠ることなく行う。規則の厳格なることはこれで分かるであろう。夜、冷気を催す。

○寒暖計80度【26.7℃】 ○正午迄161海里○北緯6度15分○西経14度39分

旧暦万延元(1860)年6月07日(新暦7月24日)【6月08日】晴曇不定、南の風。

又、東南に向う。逆風で船は余り進まない。夜、冷気で袷衣を着るがまだ寒さを感じる。

○寒暖計80度【26.7℃】 ○正午迄167海里半○北緯4度05分○西経12度30分

旧暦万延元(1860)年6月08日(新暦7月25日)【6月09日】晴、東南の風。

又、東南に向う。風波の静かなことは前日と同じである。午後2時過ぎ、何の試験なのか分からないが大砲(200ポンド)を打った。発射音は非常に強烈だが、小砲の発射音に比べれば響きは甚だしいということではない。却って心気快濶さを感じる。夜、冷気が肌を刺す。さて、ニューヨークで碇を揚げてから、水を蓄える所が無く(セントヴィンセント島では水が枯渇していて補給出来なかった)、この辺りで蓄えの水が無くなり掛けてきた。このため、御飯のときでもみだりに飲むことは許されず、僅かに一杯の水を飲んだ。尤も、水夫は職業上全力を尽くすので、彼等の喉の渇きは非常なものであつたらう。それでも御飯以外は、一杯の水を飲むのも許されなかった。いわんや我々日本人一行でも同じである。水の尊いのはこのことで初めて分かった。

○寒暖計76度【24.4℃】 ○正午迄159海里半○北緯2度59分○西経9度49分

旧暦万延元(1860)年6月09日(新暦7月26日)【6月10日】晴、南東の風。

又、東南に向う。風波の静かなことは前日と同じである。

○寒暖計79度【26.1℃】 ○正午迄171海里半○北緯2度41分○西経5度50分

旧暦万延元(1860)年6月10日(新暦7月27日)【6月11日】晴、南東の風。

又、東南に向う。10日前から南東の風のみで船の進路は進まず、一日に200海里を進むことは少なくなった。唯、風波が静かで安静に座っている様な感じで

あり、日本人で船酔いしている人は居ない。

○寒暖計79度【26.1℃】○正午迄189海里○北緯1度53分○西経4度07分

旧暦万延元(1860)年6月11日(新暦7月28日)【6月11日】晴、南の風。

又、東南に向う。午後風が強くなり満帆に風を受け、船の速度も近日に無い速さである。夜、冷気を催す。日本の【旧暦】八月頃の気候である。夜半、冷気で目が覚めた。

○寒暖計77度【25.0℃】○正午迄198海里3/4○北緯1度15秒○西経1度17分

旧暦万延元(1860)年6月12日(新暦7月29日)【6月13日】晴、南の風。

又、東南に向う。風が強く船の速度は非常に速い。唯、船の揺動が酷く、その傾きは象限儀8～9度になる。今日は日曜日であり、午後赤道直下を通過する。気候は緯度に反して涼しく、単衣では寒いくらいである。この辺りは太陽直下から20度前後であるが、尚この様な気候である。日本人は、赤道直下と言うと極熱の状態ですら熱射病で死んでしまうと考えているが、今その場所に居ると、赤道直下は勿論太陽直下と言えども寒暖計100度に至らない。どうして熱射病で死んでしまうことがあるのか。百聞は一見に如かずとはこの事である。夜冷気で綿入れを着た。

○寒暖計75度【23.9℃】○正午迄190海里○北緯0度17分30秒○東経1度15分

旧暦万延元(1860)年6月13日(新暦7月30日)【6月14日】晴、南の風。

又、東南に向う。午後風が止んだので帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関のみで航行する。帆力が無いので船の傾きは象限儀4～5度になる。夜の冷気については昨夜と同じである。

○寒暖計76度【24.4℃】○正午迄175海里○南緯0度33分30秒○東経4度30分

旧暦万延元(1860)年6月14日(新暦7月31日)【6月15日】曇、南の風。

又、東に向う。夜明けに右舷方向に小島が見えた。アンノボー《Annobou : アフリカのギニア湾内の島》と言う樹木森々とした島である。その山頂に湖水が有り、眺望は非常に素晴らしいとの事であるが上陸しないため、見ることは出来なかった。午後風は静かであるが波濤が高く、船の揺動は酷いものである。この辺りの海面には黄色の泡が浮かび、数里程消えない。これはアフリカのコンゴ川から流出して来たものと言われている。夜、冷気が酷くなってきた。

○寒暖計75度【23.9℃】○正午迄181海里○南緯1度50分○東経6度37分

旧暦万延元(1860)年6月15日(新暦8月01日) 【6月16日】 晴、南の風。

又、東南に向う。風は弱く帆を揚げる事が出来ない。又、波濤が高く船の揺動は酷いものである。夕方、東の方向に月が出て、月蝕が4分ほどであった。日本の暦を調べてみると今暁九時七分【午前1時24分】、左の方から月蝕が始まり、七時四分【午前4時48分】下の左に終わるとの記述がある。現在、この地で見ると、夕方右の方から月蝕が始まり、五時【午前8時】右の下に終わる、これは地球の各地が時間差があるのでこの様になっている。日本の江戸は東経137度であり、大西洋(原文は圧瀾海(あつらんかい))の西経43度の所は午線で、昼夜が反対となる。これを基に考えるとこの辺りの東経8度の所では、日本の江戸との時差は8時間前後であるだろう(日本昼夜12時を以て計算した)。そのため、日本では今暁の月蝕であり、この地では夕方である。このため、地球一周の間、一日の差があることは間違いない。自分の友人《加賀金沢前田家来、佐野鼎のこと》の持っている英書に拠って時差を考えるに、航海する者が知らないと言う事はない。時差の大略は以下である。

時差

0度	ロンドン	英国首都
東経15度	シーラシユス 《シラクサ》	地中海シシリー島の南東岬
東経30度	シントベイトルビュルク	ロシア首都 (セントペテルブルグ)
東経45度	ベイテート	アラビアの内地 《バグダードの事か》
東経60度	アラルシー	タタール湖水
東経75度	シリンガバテム	インドの西海岸
東経90度	タシア	ベンガルの内地
東経105度	カンボジア	シャムの南海の岬
東経120度	ナンキン	中国首都
東経135度	ミヤコ	日本の皇都
東経150度	シドニー	オーストラリア東南海岸
東経165度	カモサッカ	ロシアの東北境海岸
東経180度	ソンディアイランド	南太平洋中の島
西経165度	アラスカ	北アメリカ西北境の海岸
西経150度	オタヘーテ	南太平洋中の島
西経135度	ニーアルセンゲル	北アメリカ西北海岸の島
西経120度	シントロヲイス	カリフォルニア海岸
西経105度	サンタフェ	合衆国の内ニューメキシコ
西経90度	ニューオルリンズ	合衆国の内ミシシッピー川下流

西経75度	フィラデルフィア	合衆国の内ペンシルベニアの都市
西経60度	バルクラントアイランド	南アメリカ東南海中の島
西経45度	レウヤンニーロ	南アメリカ東南の海岸 《リオデジャネイロ》
西経30度	アソレス	大西洋中の島
西経15度	テネリヘ	大西洋中カナリア島の内

○寒暖計76度【24.4℃】○正午迄182海里○南緯3度41分○東経8度28分

旧暦万延元(1860)年6月16日(新暦8月02日)【6月17日】晴、東南の風。

又、東南に向う。風は弱く帆を揚げる事が出来ないので、蒸気機関で航行する。これまで蒸気機関で航行して来たが、船長の計算ミスで未だにロアンタ港《アンゴラ的首都ルアンダ》に到着していないが、燃料の石炭が無くなるうとしている。このため、今夜半から蒸気機関を用いずに、唯風力のみで航行することになる。海上で空しく漂流する。あたかも旅人が旅行中に金を使い果たしてしまった様なものである。皆困却したが如何ともする無しである。

○寒暖計71度【21.7℃】○正午迄177海里○南緯5度28分○東経10度28分

旧暦万延元(1860)年6月17日(新暦8月03日)【6月18日】曇、東南の風。

今朝は逆風で、横帆を揚げて西南に向ったり東北に向ったりして、一日に帆を変更すること数回、午後は風が止み、船が進まなくなった。この様な状態なので何時入港出来るのか分からず、水も同様に欠乏して、船長から厳命があり、一杯の水も許されなくなった。このため船中の人々は大いに困却したが、どう仕様も出来ず、唯船長の判断ミスを恨むのみであった。今度の船長は性質がけちで、石炭・薪水の支払い値段を惜しんで積み入れを十分にしなかった。逆に船中の者を厳責して消費量を減らそうとした。このため、今回の危難に逢ってしまった。しかしこの一件のみではない。人心が離反して天下の存亡を左右するのは往々にしてけちな心から生ずるもので気を付けなければならない。午後アフリカ大陸の近くに来たが、船の速度は上がらず、空しく海上を漂流する。夜になって風が全く止み、全く進まなくなってしまった。仕方なく陸地から離れること60里の所で碇を下ろした。

○寒暖計75度【21.7℃】○正午迄136海里○南緯6度11分○東経12度04分

旧暦万延元(1860)年6月18日(新暦8月04日)【6月19日】曇、雲霧模糊、東南の風。

今日も風が弱く、横帆を揚げ、西南に航行したり東南に航行するが船は余り進まない。日本人一行は歯ぎしりするけれども、如何ともすることなしであ

る。水は益々欠乏し、食後に漸く一杯飲める。そのときの騒動たるや、餓鬼が食べ物を争って食う状態に似ている。実に悲しむべき事である。

○寒暖計73度【22.8℃】○正午迄36海里○南緯6度36分○東経12度05分

旧暦万延元(1860)年6月19日(新暦8月05日)【6月20日】晴、東南の風。

又、東南或いは西南に向かい、一日に数回帆を変える。昨日に比べれば少しは前進している。今日は日曜日で、正午頃、船長からビール(酒名)一瓶、塩豚一股を出し、従者に分割して与えた。これまでかつて無い事であった。或る人が言うには、数日間大海に漂流し、船長への不平が高まったのでそれを和らげるための策で有るとの事。夜になり、ルアンダ港の近くに来たので、午後10時より蒸気機関を作動させた。これは蒸気船の定法である。もし蒸気船で、唯風力のみで入港すると、それは船長としての恥であるとの事で、大苦難を忍べども、入港の際の石炭は必ず残しておくとの事である。

○寒暖計72度【22.2℃】○正午迄62海里○南緯7度37分○東経12度28分

旧暦万延元(1860)年6月20日(新暦8月06日)【6月21日】曇、東南の風。

今朝になって東南に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関により航行する。午後に東方にアフリカ大陸を遥かに見る。午後4時頃更に明瞭に見えてきた。夕方、漸くルアンダ港に入港し、停泊する。夜午後8時頃、下碇の儀式を行う。

○寒暖計71度【22.2℃】○正午迄80海里○南緯8度20分○東経13度01分○正午より入港まで40海里○南緯8度43分○東経13度09分

旧暦万延元(1860)年6月21日(新暦8月07日)【6月22日】朝曇、午後晴。

滞船【ルアンダ港】。夜明け前に又、下碇の儀式を行う。午前10時過ぎ、現地人と見える数十人の黒人が、木を束ねたいかだの様な船に乗って果物や魚類を売買しに来た。その値段は非常に安いものである。ヲレンス(橙類：オレンジ)30個以上で25セント(小円銀)である。鯛の大小10尾で、これまた25セントである。日本人一行は船中で空腹となっていたので、各人争って購買する。その煩雑さは敢えて言うべからずである。午後、当港に停泊していた米国船

《Constellation》の船長等が来て、祝砲、音楽を奏して饗応した。今日から石炭・薪水を積み入れ始めた。夜、冷氣。

○寒暖計75度【22.2℃】

旧暦万延元(1860)年6月22日(新暦8月08日)【6月23日】朝曇、午前10時過ぎ晴。

滞船【ルアンダ港】。午前10時過ぎに御奉行等が上陸し、午後帰船された。現地人が諸物を売買しに終日数十人群がり来た。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月23日(新暦8月09日)【6月24日】朝曇、午前10時過ぎ晴。

滞船【ルアンダ港】。午前10時過ぎに官吏が上陸した。米国船一艘が入港し、互いに祝砲を發した。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月24日(新暦8月10日)【6月25日】朝曇、午前10時過ぎ晴。

滞船【ルアンダ港】。午前10時過ぎに自分達が上陸した。始めに米国の国旗が建っている場所に行く。左右に黒人が居て、男女数十人が砂土中に野菜・魚類を連ねて売っている。又少し行くと、市街に行き着く。中央に並木が有り、その下に黒人が小屋を構えて雑品を売っている。ガラスで作った飾り物の類が多く、非常に小さくて美しい。唯、砂土中なので汚れが酷い。自分達が来たのを見て喜んだり怖がったりして声高に叫び、臭気が紛々と匂い汚さに耐えられない。ここを過ぎ二・三町で左折すると高地に至る。そこに左右練堀の様に高さ六・七尺程の壁が築かれている。ここを登ると左右に大きな家が建っている。その管理は城郭と同じである。しかし、現在は大変衰微したと見えて半ば破損し、棟や梁などが崩れて戦火後の風景に似ている。帰りは来た道を返る。数十の黒人が珊瑚珠を売りつけようとしていたが、値段が高くて簡単には買えない。しかし汚い黒人が常にそれらを腕輪として使用している。その多いことは想像に難くない。海岸に来て、衣服を洗濯する光景を見ると、始めに海水に浸し、暫らくして是を揚げ、側に杭があつて是に数回打ち付け、又海水に浸す。精巧に作られた衣服でもこの様な方法では直ぐに壊れてしまうだろう。午後帰船する。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月25日(新暦8月11日)【6月26日】朝曇、午後晴。

滞船【ルアンダ港】。終日石炭を積み入れる。午後ポルトガル人来る。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月26日(新暦8月12日)【6月27日】曇。

滞船【ルアンダ港】。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月27日(新暦8月13日) 【6月28日】曇。

滞船【ルアンダ港】。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月28日(新暦8月14日) 【6月29日】朝曇、午後晴。

滞船【ルアンダ港】。午前10時頃ポルトガル人の婦人が来る。容貌は日本人に似ている。午後再び上陸した。訳有って遠くへは行かず、早々に帰船した。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年6月29日(新暦8月15日) 【6月30日】朝曇、午後晴、南の風。

午後2時過ぎに碇を揚げた。始め西北に向かい、その後方向を変えて西南に向った。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関のみで航行する。一里程航行したとき、陸上から合図の砲声があった。このため、暫らく船を停船した。何事が起こったのかと尋ねると、船中の者が一人乗船せずに陸上に残っていたので、士官一人が小船に乗って連れ帰って来た。この事は船長が始めから知らないという事ではなかった。しかし、碇を揚げるとき、船中にお触れがあったので、船の規則を変える事が出来ず、止むを得ず碇を揚げたとの事である。嚴重なことはこの様である。夜、風波穏やかで平路の様である。

○寒暖計不試

ルアンダ情勢

ルアンダ(魯安達)港は、西アフリカの一港でポルトガルの所領である。海門は北西に面し、東は皆平山で大樹は生えていない。南から西に掛けて一線の砂洲が出ていて長さ三里程、その間に大きな湾がある。海門の幅は一里強、ここから乗船場まで二里強である。東南の間に千戸の連軒がある。二砲台あり、一つは北の海中に築出し、もう一つは南側に沿って高地に築いてあり、管理は極めて嚴重である。市街の一部は広く、一部は狭くなっており、その広い部分には中央に並木があり(幹はサルスベリに似て、葉はウラジロの様で円形である)、その並木の下に現地人が小さな家を建てている。その小さな家は僅かに身を容れるだけのもので、家の前の汚い砂土の中に雑品を陳列して、座り売りしている。狭い部分には左右に人家が有り、レンガ等で建てられており、その高さは二階から四階に至り、窓にはガラスを用い、米国の造築法と同じである。高地にはポルトガルの官舎或いは官吏の家があり、美を尽くしている。その道は左右三道に分かれ、皆瓦石を敷き、高さ六・七尺程の壁を設け、所々に街灯を建て、常時兵卒を置いて非常事態に備えている。昔、ポルトガルが隆盛であった頃、多少の金を使って大いにこの

地を開拓し、造築を盛んにして各家の内装を極め、前述した様に堂々とした造りの建物があつたが、現在、その多くは破壊したり、棟や梁が壊れたり或いは石壁が崩壊して、甚だしいものは倒壊して僅かに礎石を残すのみである。現地人は山麓に小さな家を建てて居住している。板で壁にし草茅を覆い、土の床に一草席を敷くのみであり、日本の蝦夷の家と同じである。さて、この港は風浪等の憂いが無く、船の停泊には非常に便利であり、喜望峰《アフリカ南端の岬》を通過する船の多くは、ここに来て風向きを待ったり或いは石炭等の欠乏を補い、常時数十艘以上の船舶が停泊している。今回、自分達が寄港したときも、英国・米国・ポルトガルの船舶が二・三十艘停泊していた。唯領主国であるポルトガルが衰退したため、終に寂寥とした港となってしまった。

風俗

男女は色黒く、全身炭漆の様である。衣服は腰に腰巻を着用して陰部を覆い、肩下は袈裟の様な物を着て、帽子や靴は履いていない。甚だしい者は裸体で僅かに陰部を隠す程度である。その形はまるで羅漢僧に似ている。又、目の側や腕・背に刺青を入れている。目の側には彡形或いは三星の彫り物がある。腕・背は☷の様な坤卦(こんか)が重疊したもの、又、☰の様に乾卦(けんか)が縦横した形がある。しかし、色黒いため見分けが付かず、唯刺青の肉跡が高くなっているためそれを判別できる程度である。女性も同様の服装で、首と腕に珊瑚或いはガラスの環を付け、首に更紗の布をつけている。且つ声高く群犬が吼え集まっている様である。自分達を見て、左右から群がり来て煩くて仕様がな。又、何でも頭上に載せて歩く。たとえ魚獣の肉でも頭上に載せ、汚いと言うことを知らない。性質は非常に無知で豆と麦の区別さえ出来ない。自分が或る物を買ったが、1ドル(大円銀)の価値の尊さが分からず、25セント(小円銀)の価値の低いものの数多い方が良いと考えている。そのため、1ドル銀貨1個で物を買う者には売らずに、25セント銀貨2個で買う者に売る。その他、大金の珍しい物でも金銀や飲食の類でなければ受け取らない。ポルトガルの官吏が首或いは足に鉄の鎖を繋ぎ、四・五人或いは六・七人を連ねて【彼等を】使役させている。これは遁走を防ぐためである。但し、食が飢えれば人のために働き、食に飽ければ官事と言っても逃げ去る。このため、この様にしているとこの事である。食は常に魚獣を主食とし、粒食はしない。或る人が試しに米飯を与えたが、怪しんで食べようとしなかった。又他に一種の黒人が居る。顔及び腕に刺青をしている。顔の刺青は額から鼻を貫いて長さ一寸ばかり縦に入っている。眼の側に三角形の刺青、腕に亀甲或いは坤卦を重疊した形の刺青がある。衣服は英米の水夫と同じである。アフリカのゴイ

ネア《ガーナ》・マロヒア《モンロビア》と言う所の者であったが、雇夫となって石炭の運送を行っているとの事である。現地人に比べれば、少しは愚かではないのだろう。又、この辺り在住のポルトガル人は、黒髪で身長が短いのは日本人の同じで、その衣服は欧米人と同じである。行動には車に乗らず駕籠に乗る。その駕籠かきには現地人を使用し、その駕籠は四面に更紗を張り、麻縄で台を釣り、長くて足を前に伸ばせるようになっており、左右に肘掛を設けてある。それらを使用しないときは、取り外して一束にして収容するため、至って簡便である。且つ、この地は水に乏しいので、三十里外から船で運送してくる。このため、現地人は椰子の水を飲料として生涯を送っている。

時候

この地は南緯8度、東経13度の所で、非常に炎熱である。今、太陽は北の夏至にあり、この地点を離れていること20度余り、この地を基に判断すると今は冬ということになるが、しかし温暖なことは日本の五月頃の気候で、現地人の多くは裸体である。その暑さは以て知るべしである。

草木

多忙で詳細に探査することは出来なかった。上陸のとき、現地人の売買する物を見ると、大柑・椰子・芭蕉実・松の実・珊瑚樹・麦粉の類であった。蔬菜は至って少なく、僅かに二・三束を見る程度である。他に路傍の木に、幹は〇〇に似て葉はシダの様で、やや大きなものがある。又、山際に奇木がある。枝葉は皆青く、日本の青桐に似て、小枝が混ざって生えている。その枝を折ると白汁が出て来る。現地人はこれを毒樹と呼んでいる。今、その名前は忘れた。

生物

生物は象・猿・駝鳥が多い。そのため、象牙及び駝鳥の卵を常時売買している。魚類も又多い。船中に持って来る物を見ると、鯛・うなぎその他雑魚数尾があり、その値段は安く、空腹を満たすには十分である。

貨幣

この地では鑄造はしておらず、ポルトガルから輸入している。銀・銅貨が多い。円形で英米のそれらと同じである。船舶の往来が多い地なので、他の貨幣も融通出来るとの事である。

物価

物価には定価が無く、その人に拠って高くもなったり安くもなったりする。

一 象牙一個	1ドルから20ドルまで
一 珊瑚珠十個	25セント、1ドル、3ドル等定価なし
一 籐の籠一個	25セントから50セントまで
一 菜一束	1ドル
一 鯛十尾	25セント
一 磁器四枚	50セント
一 大柑三十顆	25セント
一 鶏卵三十個	1ドル
一 ガラス製のネックレス	10セントから25セント
一 駱駝の卵一顆	1ドル

旧暦万延元(1860)年6月30日(新暦8月16日) 【7月01日】曇、午後2時頃微晴、西南の風。

西南に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関で航行する。冷気が酷く、袷を着ているが尚寒さを感じる。夜、波濤静かで停泊している様な感じである。

○寒暖計70度【21.1℃】○正午迄128海里○南緯10度36分○東経12度36分

旧暦万延元(1860)年7月01日(新暦8月17日) 【7月02日】曇、西南の風。

又、西南に向う。逆風で蒸気機関で航行する。午後に水夫銃隊の訓練がある。且つ、小砲隊の者、円周一尺程の的を設けて射撃する。船が揺動しているためか、中々的中しない。午後2時過ぎ、東北アフリカを遥かに見る。夜、寒冷で日本の【旧暦】八月末頃の気候である。風波が穏やかなのは昨日と同じである。

○寒暖計71度【21.7℃】○正午迄170海里○南緯13度19分○東経11度53分

旧暦万延元(1860)年7月02日(新暦8月18日) 【7月03日】曇、西南の風。

今日になって南に向う。波濤は静かであるが、逆風で帆を揚げる事が出来ない。この辺は寒冷が甚だしく、日中と言っても綿入れを着用する。夜は寒冷が厳しくなった。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄155海里○南緯15度03分30秒○東経11度08分

旧暦万延元(1860)年7月03日(新暦8月19日) 【7月04日】曇、南の風。

又、南に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ない。今日は日曜日である。太陽の距離が日に遠く、寒冷なること益々烈しく、綿入れを着ても尚寒く、二重ね或いは三重ねをする者もいる。夜は昨日と同じである。

○寒暖計61度【16.1℃】○正午迄148海里○南緯17度29分○東経11度19分

旧暦万延元(1860)年7月04日(新暦8月20日)【7月05日】曇、西の風。

今日になって東南に向う。帆を揚げていると言っても風が弱く十分でない。午後小砲隊の訓練がある。平生と異なり、長さ二十間程隔てて人形の的を設け、頻りに発砲する。船中のため、的中は少ない。夜、寒冷。

○寒暖計62度【16.7℃】○正午迄175海里○南緯20度18分○東経11度14分

旧暦万延元(1860)年7月05日(新暦8月21日)【7月06日】朝晴、午後曇。

又、東南に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ない。夜12時頃から俄かに大風が吹いて来た。暫らくして止み、波濤が荒れ狂うには至らない。

○寒暖計68度【20.0℃】○正午迄190海里○南緯23度03分○東経13度20分


旧暦万延元(1860)年7月06日(新暦8月22日)【7月07日】曇、東南の風。

又、東南に向う。風はあるが弱く、帆を張ることが出来ず、一日の間に帆を揚げ下げすること頻りである。午後に船の左右前後に大鯨が数千尾来て、二・三里の間消えなかった。これを見て少なからず船中の鬱を払う。さて、この辺りに来て寒冷が益々烈しくなるのかと思っていたが、綿入れ一枚で尚暖かい。地勢の影響、海風の多少によって異同があるのだろう。夜、風波大変静かである。

○寒暖計68度【20.0℃】○正午迄178海里○南緯25度41分○東経14度03分

旧暦万延元(1860)年7月07日(新暦8月23日)【7月08日】晴、東南の風。

又、東南に向う。午後俄かに逆風が吹き、帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関で航行する。この辺りから波濤が高く、船の揺動は平日と異なっていた。夜、一天雲が無く多くの星が爛々と輝いている。初めて南極星を見る。形は以下

の様である 。思うに、この星は終夜空にあつて、北極星が定位置にあるようにはならないみたいである。そうであるならば、北斗七星の様なもので、航海中の人がこの星を標的とするだけである。恐らくは本当の南極星ではないのだろう。しかしながら、自分は星学に詳しくは無いので、その是非を検討することは出来ない。後日、智者に聞くことにしよう。

○寒暖計66度【18.9℃】○正午迄189海里○南緯28度34分○東経14度31分

旧暦万延元(1860)年7月08日(新暦8月24日) 【7月09日】 半晴半曇、南の風。

又、東南に向う。逆風が吹き、帆を揚げる事が出来ない。午前10時過ぎ、槍剣の訓練があった。この近辺は波濤が常に高く、風は静かであるが、船の傾きは象限器七・八度を下らない。夜も同じである。

○寒暖計66度 【18.9℃】 ○正午迄162海里○南緯30度54分○東経14度44分

旧暦万延元(1860)年7月09日(新暦8月25日) 【7月10日】 曇、南の風。

又、東南に向う。波濤が高く、且つ逆風であるので船は余り進まない。正午から東に向う。横帆を揚げ、船の速度が少し速くなった。夜になって船が又揺動した。

○寒暖計66度 【18.9℃】 ○正午迄133海里○南緯32度37分○東経15度32分

旧暦万延元(1860)年7月10日(新暦8月26日) 【7月11日】 曇、西の風、午後東北の風。

又、東南に向う。順風で数帆を揚げ、船の速度は非常に速くなった。今12時(日本の九つ時に相当)、喜望峰【南アフリカ南端、荒天で有名：ケープタウンがある】を過ぎる。船の左右に現地人の船が航行するのを見かけて、港が近いのを知る。南緯34・35度に至って、太陽直下を離れること40度以上になったので、酷寒で雪天にでも遭遇するのかもしれないと思っただが、頗る温暖で綿入れ一枚でも寒さを感じない。風は益々順風で、蒸気機関を停止している。夜になって風が突然止み、船の速度は遅くなった。

○寒暖計67度 【19.4℃】 ○正午迄182海里○南緯34度32分○東経17度48分

旧暦万延元(1860)年7月11日(新暦8月27日) 【7月12日】 晴、東の風激しい。

今朝になって風が激しく、船の速度は非常に速くなったが、逆風なので、俗に言うマギリ航法《ヨットが風に対して斜めに走行する航法》で、里数は多いが直線距離はそれ程進んでいない。夜になって益々風が激しくなり、怒涛雷の様で、その音を聞いて恐怖を抱かなかった者は居ない。船の揺動は烈しく、安眠が出来ない。

○寒暖計64度 【17.8℃】 ○正午迄105海里○南緯35度17分○東経18度36分

旧暦万延元(1860)年7月12日(新暦8月28日) 【7月13日】 朝曇、午後雨、夜晴、東の風激しい。

今日になって東風が烈しく、ときに南、ときに東北に向かい、頻りに帆

を変えて航行していたが、烈風波高く、船は殆ど進まない。船の揺動が烈しく、波濤が船上を飛んで行く。午後になって風が少し止み、小雨が降ってきた。午後2時過ぎに一羽の水鳥が船上に飛来してきたので、水夫がこれを捕獲した。その形は鷲鳥の様で、翼が長く四尺ほど、くちばしは赤黄色で上くちばしが屈曲して下くちばしに達している。全身色白く、翼は白黒斑で鷲の翼に似ている。名前はアルバトロス《albatross、あほうどり》と言う。夜になって漸く風は静かになったが、波濤が高く、船の揺動は納まらない。さて、船長の話では、この辺に來れば、方針(磁石)の差があって、真北から24・5度西を指すとの事である。そのため、針盤を変更する。【玉虫の】友人某《加賀金沢前田家来、佐野鼎》が持っている英書に基づきその差を考えた。今、その大略を以下に記す。

方針(磁石)の差

方針(磁石)は各所で小異あり、マツチュセス(マサチューセッツ：米国合衆国の一部で、東北海岸の州)のキャンブレイジ(ケンブリッジ：ボストン港の西)で、1708年に、方針(磁石)が真北から9度西を指し、1742年には8度、1782年には6度46分西を指していた。年毎に1と3/4分減少している。同国のセエラム《セエラム：Salem、ボストン北方の港町》では1808年に5度20分西を指していた。英国ロンドンでは、1580年に11度15分東を指し、1672年に2度30分西を指し、1780年に22度41分西を指していた。仏国のパレイス《パリ》では、1550年に8度東を指し、1660年に真北を指し、1769年に20度西を指す。ロンドン及びパリでは当時は年毎に夫々10分及び11分増加していた。しかし、ロンドンでは今日の測量により、殆ど差が無いことが分かった。ケイフヲフクーテホウブ(アフリカの喜望峰を言う。Cape of Good Hope)の辺りでは、年毎に大凡7分その差が増加している。これ毎年の針差の変動の他に、日々の些差があり、ロンドン、パリ及び【米国の】ケンブリッジで10分から15分の変動がある。この不定の針差により、その場所でときとして磁石の帝位に來た時は、凡そ午前8時(日本の辰時に相当)、午後2時(日本の未時に相当)まではその差が増し、夕方から朝までは減らし、その様にして磁石を再び元の位置に戻す。前記中に揚げた測量の増加により、次の針差を得る。

【詳細すぎるので割愛する】

○寒暖計71度【17.8℃】○正午迄100海里○南緯36度36分○東経18度16分

旧曆万延元(1860)年7月13日(新曆8月29日)【7月14日】晴、北の風。

今朝になって真東に向って航行する。数帆を揚げたが波濤が高く、船の速度は速くない。この辺りは波濤が益々高く、常に飛沫が船上を飛び交う。そのため、船の揺動も甚だしく、部屋の道具がときとして転倒する。喜望峰の高波に

着いては以前から聞いて知っていたが、今その言説の正しいことを知った。夜、船が大分揺動した。

○寒暖計67度【19.4℃】○正午迄129海里○南緯37度32分○東経20度31分

旧暦万延元(1860)年7月14日(新暦8月30日)【7月15日】晴曇不定、或いは小雨、朝東北の風、午後西の風。

今日になって東南に向う。風が静かで船の速度はゆっくりである。午後に西風に変わり、満帆に風を受け、船の速度は漸く速くなった。波濤は山の様で、揺動も尋常ではなく、部屋の道具がしょっちゅう転倒した。船上では暫しも足を留めている事が出来ず、一同大いに恐怖を覚えた。一人二人船酔いして、平臥する者が出た。夜になっても揺動は止まず、時々目を覚ます。

○寒暖計68度【20.0℃】○正午迄181海里○南緯37度46分○東経23度29分

旧暦万延元(1860)年7月15日(新暦8月31日)【7月16日】晴、西南の風。

又、東南に向う。順風で数帆を揚げ、船の速度は頗る速い。唯、波濤が高く、船の揺動が烈しい。午後2時過ぎ、風が突然止み、船は進まなくなった。夜になっても風は吹かず、海上に漂流する。

○寒暖計70度【21.1℃】○正午迄220海里○南緯37度54分○東経28度06分

旧暦万延元(1860)年7月16日(新暦9月01日)【7月17日】晴曇不定、北東の風烈しい。

又、東南に向う。数帆を揚げる。烈風で波濤が益々高くなり、船上を飛沫が飛び交う。船の揺動も又烈しく、部屋の道具が左右に転がり、暫しもじっとしていない。晴天が急に四面黒雲に変化して、風雨が烈しくなり、波濤が船にぶつかる音が怒雷の様で、畏怖を感じない者は誰一人として居ない。船中の騒動は常に倍していた。これぞ難海と言うべきであろう。唯船の速度は速く、近日の比ではない。夜、船の揺動は止まず、転々として枕に就くことが出来なかった。

○寒暖計71度【21.7℃】○正午迄87海里半○南緯38度13分○東経29度58分

旧暦万延元(1860)年7月17日(新暦9月02日)【7月18日】晴曇不定、北東の風烈しい。

又、東南に向う。烈風のため横帆を僅かに二三揚げるのみである。波濤が高く、船は十分には進まない。しかも船の揺動が烈しく、左右に傾くこと象限器15・16度になろうとしていた。一同皆恐怖を覚えた。さて、この二三日前から波濤が頗る高く、米国人も訓練・音楽演奏を停止し、唯騒動しているだけである。

夜になっても烈風は止まず、波濤の音が怒雷の様で、話をするにしても通じない。まして就寝することも出来ない状態である。

○寒暖計69度【20.6℃】○正午迄200海里○南緯38度56分○東経34度19分

旧暦万延元(1860)年7月18日(新暦9月03日)【7月19日】晴雨不定、北東の風烈しい。

又、東南に向う。烈風のため船の揺動が烈しく、部屋で安座することが出来ない。夜になっても止まず、波濤が船上を飛び交う。ややもすれば満身潮水に浸る。

○寒暖計67度【19.4℃】○正午迄218海里○南緯40度07分○東経38度31分

旧暦万延元(1860)年7月19日(新暦9月04日)【7月20日】雨、東の風烈しい。

又、東南に向う。烈風は止まず、且つ雨が降り、怒濤が船上を飛び交う。ほとんど正月二十七日の風景を彷彿させる。午後急に帆を変え、東北の方向に向かう。午後4時過ぎ西風に変わり、順風で数帆を揚げる。船の速度は非常に速いが波濤が高く、部屋中の道具が破損するその数が分からないほどである。夜になっても風は止まず、安眠することが出来ない。この辺りは寒冷が甚だしく、朝夕綿入れ二枚を着ているが、尚寒さを感じる。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄200海里○南緯42度23分○東経42度03分

旧暦万延元(1860)年7月20日(新暦9月05日)【7月21日】晴、西の風。

今朝から東北に向う。順風で数帆を揚げる。船の速度が速いのは矢の様である。波濤が高く、船の傾斜は象限器25・6度となる。午後風がやや静かとなり、音楽を演奏する。この二三日前から烈風で波濤が高く、音楽を演奏することが出来ず徒に騒動していたが、今日になって漸く晴天、且つ順風となった。このため、始めて音楽を演奏することとなった。この音楽を聞いて一同皆安心する。夜になって船の揺動は緩やかとなった。

○寒暖計58度【13.3℃】○正午迄220海里○南緯39度47分○東経44度19分

旧暦万延元(1860)年7月21日(新暦9月06日)【7月22日】晴雨不定、西の風。

又、東北に向う。順風で船の速度は非常に速い。アフリカのマルチウス島《モーリシャス島：インド洋上の島》に行き、石炭等を積み入れすべきところであったが、幸いに順風が吹き続き、直ぐにジャワ島に向おうと評議一決した。ここからジャワ島迄大略四千里【約7000km】である。夜、風波が静かになり、その静かさは近日の比ではない。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄260海里○南緯39度40分30秒○東経49度50分

旧暦万延元(1860)年7月22日(新暦9月07日)【7月23日】曇、時々雨、西南の風。

又、東北に向う。数帆を揚げるけれども、風が弱く船の速度は速くない。唯、波濤が静かで船の揺動はしない。夜12時頃から西風に変わり、船の速度は非常に速い。寒冷が肌を射す。

○寒暖計63度【17.2℃】○正午迄149海里○南緯39度57分○東経53度

旧暦万延元(1860)年7月23日(新暦9月08日)【7月24日】晴、西の風。

又、東北に向う。順風で数帆を揚げ、船の速度は非常に速い。午後から風が強くなり、船が頻りに揺動する。夜、波濤高く、船の傾斜は象限器23度以上となる。

○寒暖計64度【17.8℃】○正午迄165海里○南緯39度44分○東経56度19分

旧暦万延元(1860)年7月24日(新暦9月09日)【7月25日】雨、西の風。

又、東北に向う。順風で船の速度は非常に速い。午前10時過ぎ、雨が降ってきて、風が南風になり且つ静かである。船の速度は今朝に比べれば遅くなった。夜になっても雨は止まない。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄257海里○南緯39度37分○東経61度53分

旧暦万延元(1860)年7月25日(新暦9月10日)【7月26日】雨、西南の風。

又、東北に向う。風が静かで船足は速くない。昨夜からの雨は止まず、寒冷が身に染みる。午後2時頃、雨が益々烈しくなり、午後4時過ぎに急に快晴となる。夜にまた風が激しくなり、波濤の立てる音が恰も怒雷の様で、これを聞いて恐れない者は居ない。且つ船の揺動が烈しく、安眠することが出来ない。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄109海里○南緯38度57分○東経63度54分

旧暦万延元(1860)年7月26日(新暦9月11日)【7月27日】時々雨時々晴、西南の風。

又、東北に向う。順風で船の速度は非常に速い。午前10時過ぎ、左舷に船一艘が見えたが、遠くなので何処の国の船か分らない。午後2時過ぎ、急に風雨となったが激しくは無く、船の揺動もそれ程ではない。夜、寒冷が甚だしく、日本の【旧暦】10月頃の気候であった。

○寒暖計61度【16.1℃】○正午迄195海里○南緯37度58分○東経67度43分

旧暦万延元(1860)年7月27日(新暦9月12日)【7月28日】晴、午後曇、西南の風。

又、東北に向う。朝晴天で午前10時過ぎ、急に天気が変わり、雨と晴を繰り返して一定せず、午後4時過ぎに急に大風となった。船の速度は非常に速くなったが、波濤の音が耳に響き、聞く者は大変恐怖を感じた。この辺りは寒冷が甚だしく、綿入れ二枚でも尚寒く感じる。【ルアンダ港で】碇を揚げて以来、かつてない寒冷である。

○寒暖計60度【15.6℃】(船の場所により異なり、上層の室外では48度を下ると言う)○正午迄168海里○南緯38度05分○東経71度09分

旧暦万延元(1860)年7月28日(新暦9月13日)【7月29日】晴、西南の風。

又、東北【原文は「東南」となっているが、近辺に暗礁の記述が無く、且つジャワ島を目指しているのであれば方角として東北と考えられる】に向う。午後、風が静かで、船足は遅い。唯、波濤が穏やかで、近日に無いくらいである。この辺りは寒冷が甚だしく、綿入れ二枚でも尚寒く感じ、日本の冬の季節である。午後4時過ぎにあほう鳥と言う鳥を捕まえた。水夫共が群がり寄って来て弄んでいたが、あほう鳥が怒って口を開け、人を食わんとした。これは船中の一興で、御奉行等は距離を置いて一見された。夜、風が益々静かになり船足は更に進まない。さて、今日初めて太陽距度に差があることを聞き、友人某【前出、佐野鼎】の英書を和訳したものを下記に記す。

正午太陽距度表(竜動クリインイチ《ロンドン、グリニッジ》にて是を検討した。)【理科年表における視赤緯の事】

1848年、1852年、1856年、1860年(但し、4年周期で、前の余り数4を合わせて、23時間15分12秒となる。これを1日とする。365日5時間48分48秒を一年とする。この四年の例から推察すると、幾年と言っても分ることとなる。)南北緯23度28分を両回帰線とする(米国暦の6月21日夏至、12月22日冬至)。米国暦の三月及び九月二十一日、太陽が赤道に在る。

【詳細すぎ、且つ小さいので割愛する】

○寒暖計51度【10.6℃】○正午迄194海里○南緯37度37分○東経74度52分

旧暦万延元(1860)年7月29日(新暦9月14日)【8月01日】曇、西の風。

又、東北に向う。風が静かで、船足は遅い。夕方、アムステルダム島《インド洋の南方の島》の北岸を通過する。この島は南緯38度02分、東経77度37分の場所にあり、長さ大凡十三町、周囲大凡三十七町の小島で、人は住んでいない。且つ山に草木無く、唯、火口・温泉がある。海鳥が多い。又、ロツフ《オランダ語 rob:おっとせい》と言う獣が居て、それは海狗(かいこう:おっとせい)と

言う。この島の南に距離凡そ二十里隔てて、又一つの無人島がある。その名をセントヘーリス《St. Paul Island：セントポール島》と言う。皆、インド洋諸島に属する。夜、風波が静かであったが、夜12時頃から風が強くなり、船足が速くなる。

○寒暖計62度【16.7℃】○正午迄60海里○南緯37度24分○東経76度01分

旧暦万延元(1860)年8月01日(新暦9月15日)【8月02日】晴、北西の風。

又、東北に向う。風が強く、船足はかなり速い。午後2時過ぎ、風が益々強くなり夜になっても衰えない。波濤の音が耳に響くが、幸いに波高がそれ程高くはならない。このため、烈風と言っても船の揺動は少なく、平常どおりである。この辺になって少し暖気を感じ、夜中でも寒さを感じない。

○寒暖計63度【17.2℃】○正午迄196海里○南緯37度24分○東経80度07分

旧暦万延元(1860)年8月02日(新暦9月16日)【8月03日】晴、西北の風。

又、東北に向う。昨日と同じく、船足はかなり速い。夜、風波が非常に穏やかになった。

○寒暖計62度【16.7℃】○正午迄238海里○南緯36度38分○東経84度52分

旧暦万延元(1860)年8月03日(新暦9月17日)【8月04日】晴、北西の風。

又、東北に向う。今日になって風が益々順風となり、蒸気機関を用いなくとも船足はかなり速い。

○寒暖計63度【17.2℃】○正午迄210海里○南緯35度59分○東経89度04分

旧暦万延元(1860)年8月04日(新暦9月18日)【8月05日】晴、北西の風。

又、東北に向う。夜12時頃から風が強くなり、小雨が降ってきた。船が少し揺動する。

○寒暖計63度【17.2℃】○正午迄200海里○南緯34度39分○東経92度21分

旧暦万延元(1860)年8月05日(新暦9月19日)【8月06日】晴、北西の風。

今日になって北東に向って航行する。午後2時過ぎ、槍剣及び防火の訓練があった。夜になって一天雲無く、全星が爛々と輝いている。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄200海里○南緯32度16分○東経95度10分

旧暦万延元(1860)年8月06日(新暦9月20日)【8月07日】晴、北西の風。

又、北東に向う。午後2時過ぎに風が止み、船足は遅くなった。夜に入っ

て尚風が無く、帆を揚げる事が出来ず、空しく漂流する。唯、波濤が平坦で座上に居る様で一同皆安眠する。

○寒暖計69度【20.6℃】○正午迄170海里○南緯30度27分○東経97度49分

旧暦万延元(1860)年8月07日(新暦9月21日)【8月08日】快晴、北東の風。

又、北東に向う。昨日よりも更に風が無く、船は少しも進まない。このため、午後2時過ぎに蒸気機関を作動させる。さて、前月11日より蒸気機関を用いず、唯風力のみで今日まで航行してきたが、大抵、【一日に】百五十里或いは二百里を進む。海上の幸せはここに尽きる。この辺りに来て風が始めて止む。ここより日を追って赤道に近くなる。赤道は南北の風が一つに集まる所なので、風力が急に消散し、風が無いのと同じである。たとえ風があると云っても、烈しくはならない。それ故、ここから蒸気機関で航行するのは、航海者の技である。夜波濤高く、船が少し揺動する。

○寒暖計68度【20.0℃】○正午迄78海里○南緯29度29分○東経99度44分

旧暦万延元(1860)年8月08日(新暦9月22日)【8月09日】晴、東の風。

又、北東に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関で航行する。この辺りでは大いに暖気を感じ、綿入れ一枚を脱ぐ。

○寒暖計70度【21.1℃】○正午迄150海里○南緯27度16分○東経100度08分

旧暦万延元(1860)年8月09日(新暦9月23日)【8月10日】晴、東の風。

又、東北に向う。今日は日曜日で、船中の者は服を着替え、午前10過ぎに上層階で全員椅子を並べてキリスト教の説教を聞く。快晴で波濤が静かなので平日よりも盛会である。午後2時過ぎに南風に変わり、帆を揚げる。夜になり風が益々強くなり、船足が非常に速くなった。日中少し熱くなり、日本の五月末頃の気候となった。

○寒暖計68度【20.0℃】○正午迄158海里○南緯24度46分○東経101度00分30秒

旧暦万延元(1860)年8月10日(新暦9月24日)【8月11日】晴、東の風。

又、北東に向う。昨日から順風で船足が速くなった。夜、蒸し暑くなる。

○寒暖計71度【21.7℃】○正午迄200海里○南緯21度53分○東経103度10分

旧暦万延元(1860)年8月11日(新暦9月25日)【8月12日】晴、東南の風。

又、東北に向う。順風で数帆を揚げる。船足が非常に速く、1時間(日本の半時)で十一里程航行する。午後2時過ぎ、益々順風となり船足は矢の様であ

る。夕方、水夫達がステッキ《ボクシング》と言う芸をするのを見る。その技は、始め兩人が相対し各人が弓袋の様な物を手に覆い、互いに相争って顔を打つ。日本の相撲の様である。その弓袋は全部革で出来ており、親指、人差し指の間を分割して、四指は連縫している。その中に柔毛を入れて膨張させる。それは顔面を打ったときに傷つかないようにするためである。又、フェンシングアールト

《Fencing Artか》と言う芸を見る。日本の撃剣に似ていて、各自面を被り、鉄で出来た長さ二尺の剣で互いに撃争する。面は細かい錬鉄で編み、首の後ろにボタンがあって左右から結合する。剣には鍔(つば)が付いており、剣端に周囲の長さが五・六分の四角い鉄が付いている。刺した場合、面の中に入らない様になっているためである。肘、鎧、胴、小手は用いていない。その技は何れも珍しく、船中の藁を払うのに十分である。夜、順風で且つ風波が穏やかである。

○寒暖計72度【22.2℃】○正午迄228海里○南緯18度27分○東経104度30分

旧暦万延元(1860)年8月12日(新暦9月26日)【8月13日】曇、東の風。

又、北東に向う。日々順風で殊の外船足が進む。愉快と言うべきである。この辺りは炎熱が酷く、夜中になっても止まず安眠が出来ない。

○寒暖計78度【22.2℃】○正午迄240海里○南緯14度32分○東経105度43分

旧暦万延元(1860)年8月13日(新暦9月27日)【8月14日】晴、東南の風。

今日になって北北西に航行する。順風で船足が速い(ジャワ島は東経105度に跨り【原文は東経5度】、今船は既に東経105度43分に居る。このため少しばかり進路を西に取りジャワ島に向う)。午後右舷に小島を見る。ケスマスアエランド《Christmas Island:クリスマス島》と言う。そこは水が無く、居住は出来ない。長さ九里、横六里で、ジャワ島からの距離は百里程との事である。南緯10度30分、東経106度の位置にある。さて、午後2時過ぎに船上を散歩していたとき、米国の一士官(名前は知らない)が、銅で作った大きさ一寸ほどの十字架及び直径が三分ほどの円形のガラスで外部を黄金で飾りその中に紅毛を入れている、この両品を紐で結び、胸の前で下げていた。その紅毛の訳を尋ねたところ、彼の母の毛髪であるとのことだった。今回、遠く分れ、何時帰船するのか分らず、これを見れば直ぐに母に会った様な気になるという。父母の恩を忘れれないとのことであった。その情の厚いこと、実に感心なことである。夜午前2時頃、俄かに暴風雨が来て、暫らくして止んだ。

○寒暖計80度【26.7℃】○正午迄225海里○南緯10度58分○東経105度25分

旧暦万延元(1860)年8月14日(新暦9月28日)【8月15日】曇、東南の風。

今朝から北に向う。午前10時過ぎ、船上が急に慌しくなり、混雑を極めた。これは着岸の準備であるとの事。午後2時過ぎ、北東に向う。ジャワの山を始めて見る。1時間程進むと益々はっきりとしてきた。中央に大きな山があつて左右に小山が相連なり、樹木が繁茂している。岸から数町離れた所に数十の島よが分布し、絶景である。もう少し行くと湾、岬、岩島があり、見るのに暇が無い。この辺りは都で、ジャワヘート《Javahoofdか?》と言う。午後4時過ぎ、ソンデーストタイト《Sunda Strait: スンダ海峡》と言う所に着た。南にプリンスアエランド(島の名)《Prince Island》を控え、その間距離にして十里程、景色は尤も珍しいものである。さて、プリンスアエランドはジャワ領中の一島で、常に大蛇が居て人間を害傷するとの事で、人家が無いと言うことである。この間を過ぎ、陽は既に西山に傾き、十五夜の月が海面に上り、一天雲無くてあでやかで美しい《原文嬋娟(せんけん)たり》。しかし【中秋の名月ではあるが】船中に酒肴が少なく、特に他国の船に身を託していれば、何事も思う通りには行かず、心なしか望郷の念を感じる。夜12時過ぎにアンシヤボエン《スンダ海峡の最も狭い所の場所》に着いて停泊した。ここは大湾で東南に灯台があり、樹木が繁茂して人家を覆っている。北西に一小島があり、これまた樹木が森々と見える。この湾に入り、米国の商船に逢い、互いに船号を唱える。中国定海《杭州湾の入口にある普陀山島の港》を出航し、本国ニューヨークに帰るとの事。談話の間、中国では英仏が心を合わせてペーヲ(北河)《Pai-ho: 天津を経て渤海に注ぐ河で、河口の両側に砲台があつた》から攻め入り、戦争真っ最中と言う事である。その後、新聞紙を入手し、その事実を知った(巻八【10】参照)。さて、この湾は平坦で、川の様である。唯蒸し暑く、汗を拭くのに暇が無い。

○寒暖計80度【26.7℃】○正午迄212海里○南緯07度35分○東経105度11分○今日の正午からアンシヤボエン迄100海里○南緯06度03分○東経105度56分

【巻六 終】